

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	葦田氏の死と私 錯亂した文學青年の手記 : 手記
Author(s)	中井, 正文
Citation	龍南, 215 : 80 - 96
Issue date	1930-11-10
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6993
Right	

葦田氏の死と私

— 錯亂した文學青年の手記 —

中 井 正 文

I.

華かな目貫通りの雑踏を離れて、暗い露路を二〇間も入ると、美しいカフェ・ド・パリがある。眩しい光線の波から、この暗い露路に泳ぎ入つた人は大都會の心臓から僅か二〇間位しか離れて居ないのに、まるで異つた零圍氣を感じるだらう。例へば、その零圍氣は賑はしい夜祭の囃子を遠くで一人聴き入るやうな、しら／＼しい哀愁の感じである。而しその好もしい哀愁も直ぐカフェ・ド・パリによつて軟かく抱擁される。カフェ・ド・パリは砂漠の中のオアシスのやうに、いやもつと力強い魔力を以つて、この都會の放浪者を惹きつける。そして一度このカフェの味を覺えたなら、永久にその蜘蛛の巢を脱することは出来ぬ。

頭の良いカフェ・ド・パリの經營者は、わざと深い目論があつてこの地に卜したのかも知れぬ。

頭の良いカフェ・ド・パリの經營者と云へば、こゝへ毎夜集る人々の誰一人として見たものはないのである。Aは若い美しい男爵未亡人が、自分の趣味を金にあかして表はしたのだと言つた。Bは帝政ロシアの亡命貴族の仕業だと語つた。Bの説には根據があつて、一時はこの説の遵奉者が斷然勢力を握つた。といふのはかうなのである。

カフェ・ド・パリには五人のウエイトレスが居た。四人が日本人で、後の一人は西洋人だつた。

ミス・ソーニヤ——その西洋人の名前なのである——が示すやうに彼女は露西亞人だと稱して居た。

白哲——この語は特に彼女に相應しい。

鼻筋の通つた貴族的な、ギリシヤ型の鼻。いつも固く結ばれた唇。夢見るやうな碧い大きな瞳は明かに露西亞人の憂鬱をたへて居た。ブロードの髪を、惜しげもなく、綺麗に斷髪して居る彼女。彼女が洋装で現はれることは殊んど無かつた。いつも他の人のやうに日本振袖を上手に身に付けて居た。日本の振袖は小柄ですらりとした彼女には、こよなく相應しかつた。彼女の完成された美しさは、近寄り難い氣分を與へたけれども、打ちとけて話すと案外人なつこい性格を持つて居ることがわかる。

彼女はいつも憂鬱だつた。前身をしつこく訊ねられると、彼女は、唯露西亞の貴族の一人であつたと、流暢な不思議なほど癖の無い日本語で告げた。其の他は一切口を緘して語らなかつた。彼女の貴族的な美貌と時々閃かせる教養の深さとは、彼女の言を全く信用づけた。彼女はよく、ピアノに向つて、憂鬱な曲を奏した。彼女は素晴らしいピアニストでもあつた。彼女の纖い指が奏する曲は誰も知らなかつた。或ひは彼女が心の奥にひそむ奔放な情熱を深遠な音樂的教養を通して、叩き出して居るのかも知れなかつた。

カフエ・ド・パリのウエイトレスは皆完全に美人のレベルに達して居た。その中でも、ミス・ソーニャは斷然衆人の眼を惹いた。さればこそ、彼女の周圍にそんな噂も立つたのである。然し、次第に彼女が單なるウエイトレスであることがわかつて來た。

結局カフエ・ド・パリの經營者に就いては五里霧中だつた。色々の噂は噂を生んだ。然し不思議なことには、噂さの實體は大抵若い美しい女だつた。

カフエ・ド・パリには未だ色々の魅力があつた。いやカフエ・ド・パリ自身が一つの大きな魅力なのである。

上品な薄綠色の壁。眞珠色の照明。紫色の重い銀子のカーテン。そして馬鹿に大きな模様入りの玻璃窓。しつとりと、しめきつた蘭や芭蕉や棕櫚竹の植えこみ。振袖の袂をひるがへしてテーブルの間を遊ぶ五人の美しい女。フランスウヰツクの高級品は靜かにドビュツシイやマラーやシトラウスのレコードを廻轉さした。

カフエ・ド・パリの醜し出す、高尚な純巴里風の雰圍氣―それは生活に疲れた都會の人々に、ふるさとのやうに懷しまれるのも無理はなかつた。

漸次にカフェ・ド・パリの顧客も洗練されて來た。いつよりか、夜となると、藝術家のみにて占領されるやうになつて來た。濛々と、エジプト煙草の紫煙はたちこめて、神秘的な、藝術家の夢を瀾蔓させた。

2.

アスファルトの整石の上に、秋の細い雨脚が降り濺いで居た。都會の夜の光線が浅い水たまりに映えてちらちら顫へて居た。ふと、上を仰いで見ると、しつとりと濡れかゝつた梧桐の葉の蔭の街燈を無氣味な屋守が、そろそろと這つて居るのが見える。

私が郷里の先輩であり私を文壇に紹介してくれた恩人である詩人K氏に伴はれて、初めて、カフェ・ド・パリを訪ねたのはそんな靜かな晩だつた。

私の好きな女給が居ると云ふわけで、カフェ・ブランタンの外にはあまり知らぬ私に、カフェ・ド・パリは豫想外に華麗だつた。扉を開けると、高價な煙草の香りと、カクテルの匂がむつと私の神經を刺戟した。

K氏は來馴れて居るらしく、女給の嬌笑を軽く受け流して、つかつかと奥のテーブルへ突進する。

「こゝが一番地の利を得て居るんだよ」K氏は椅子に坐ると、濡れたズボンの膝をハンケチでふきながら言ふ。大きな芭蕉の葉が蔭になつて向ふ側からは、こゝに誰が居るかわからぬ。

日本の着物を着た、美しい異人娘が微笑みつゝ頭を下げた。絹糸のやうなブロードの髪が波のやうにゆらめいた。K氏は、私の名も知らぬカクテルを注文した。

「どうだい、今の女は斷然美しいだらう!! ソーニヤと云つて帝政露西亞の亡命貴族と言つて居るんだが、どうもボヘミヤの血が多分に混つて居るらしい。自分でもボヘミヤで育つたと言つて居るがね。とにかく彼女の前身は全く不可解なんだよ。第一、彼女の年齢から疑問だよ。一体に西洋人の年齢はわかりかねるが、彼女と來たら全くわからない。時には、廿に達せぬ純潔な少女に見えるけれども、人生の秘密を知つた女のやうな落ち着きを見せることもあるんだからね。然し、不思議なことには、彼女

に就いては一度だつて變な噂が立つて居ないんだよ。」ばかに陽氣になつて、のべつなしに話し續けて居たK氏はふと、口をつぐんで、私の頭上を越えて、一點に視線を止めた。私は振り返つて見た。

中折帽を眼深かにかぶつて、レイン・コートを着こんだ、色の青白い、丈の高い男が洋傘をたたんで居るのが目に入つた。

「おい、君、あの男が有名な葦田青丘だよー」K氏は大理石の卓子の上の私の手を指でつきながら囁いた。

「えゝつゝあの人が葦田青丘氏だつて？」私はその時初めて日本の生んだ天才小説家葦田青丘氏その人を見た。「葦田青丘」それは、私に取つて決して忘れることの出来ない名前だつた。葦田青丘氏が處女作「或る痴人の手記」を一流の文藝雜誌であるK誌上に發表したのは、私が田舎の高等學校の三年生の時だつた。或る痴人の手記は文壇に素晴らしいセンセーションを捲き起した。文壇は期せず、この若き天才の前途を矚目した。彼の惡魔的空想的手法は日本のエドガ・アラン・ポーと稱された。彼は決して期待を空しくさせなかつた。彼は次ぎ／＼に素晴らしい作を發表した。そして現在は一流の流行作家となつて居た。私は長い間「葦田青丘」と云ふ名を憧憬し、羨望し、尊敬し、私淑して來た。現に私がK誌の前々號に初めて發表した、「灰色の都」は明らかに彼の傑作「巴里の夜」よりヒントを得たものである。そのみならず、彼の陰鬱な、頽廢的な惡魔的作風は私にひどく影響して居るのも事實である。特に私が彼を忘れることが出来ないのは、彼が翌月號のK誌の文藝批評に、私の「灰色の都」を稱讃して、彼の最も期待する新進作家中に私の名を加へて呉れたことだつた。

私は彼に非常な尊敬と感謝の念とを持ちながら、遂に一度も會つたことはなかつたのである。

3.

雨にびつしより濡れて光つて居るレイン・コートと中折帽子を女給に預けると、葦田氏は眞直に、私達の方へ進んで來たので葦田氏に就いて、何か言はうとした私は、唇を閉じた。

彼は私達の隣りの卓子に席を取ると、一人の女給に、あたゝかみのある美しいバリトンで、カクテルとソーダ水とを命じた。私は横を向いて、彼のプロフィールをしげ／＼と見つめた。廣い額、聰明そのものに輝く瞳、高く秀でたロマン・ノーズ、引き

しまつた唇……凡べてが智的で、寧ろ冷い、近寄り難い印象を與へた。例のソーニヤが、大小の二つのコップをのせた銀盃をささげて彼の卓子に近づいた。

ふと私は、彼女の素晴らしい嬌笑を見つけて、どきまぎした。それは明らか彼に贈られたものだ。そして彼のみに贈られた微笑であることを私は直ちに想像することが出来た。私は嫉妬に似た或る感情の身内に起るのを意識した。この若い作家は、石膏の像のやうに、顔の筋肉一つ動かさなかつた。彼は、とびつくやうに、ソーダ水のストロウに唇を持つて行つた。

ソーダ水を飲み干すと、彼は初めて、頭を上げて、周囲を見廻した。K氏と視線が合つたらしかつた。先づK氏が默禮した。「やゝ、これはお久しう、」葦田氏は人なつこい微笑みを上品な唇邊に浮べながら、例の澄んだバリトンを快活に響かせた。K氏と葦田氏は交際こそあまりしなかつたが、W大學では同期生だつた。

「ね、葦田君、早速だが、今晚是非君に紹介したい人があるんだがね。」K氏は寸時、言ひ止めて私をぬすみ見た。私は葦田氏の視線をも、身内に感じて、思はず目を伏せた。

「この人が「灰色の都」の作者中川信一君、この方は先刻話した葦田青丘君だよ」K氏は如才なく紹介した。私はやうやう、顔を上げて默禮した。

「あゝ君、中川君ですか。ずっと以前からは非一度お目にかゝりたいと思つて居ましたよ！」

葦田氏はほんとうに、懐かしそうに私を凝視した。私とK氏が葦田氏に別れて再び雨のしとしと降り濺ぐ聲を歩んだのはそれから卅分ばかり後であつた。偉大な人物に接したとき、誰しも感ずる一種の興奮を身内に私は感じた。私は葦田氏の明るい、それで居て、どこか憂鬱な性格を忘れることが出来なかつた。

4.

私が二度目に、葦田氏に逢つたのは、やはりカフェ・ド・パリで一週間ばかり後のことだつた。

私は幽かな期待を抱きながら、毎夜カフェ・ド・パリの華かな雰囲気ひたつた。然し葦田氏は全然姿を見せなかつた。

暴風雨の夜だつた。烈しい雨が、甃石の埃をきれいに、洗ひ流して居た。通りには殆んど人影を見なかつた。都會はこの暴風雨の下に廢墟のやうな姿をさらして居た。都會には、蕭條たる雨音の外には、全く音響は絶えた。

私は雨の夜を愛した。暴風雨の廢墟のやうな街を彷徨するのを愛した。

私は今夜も唯一人、レイン・コートの襟を立て、兩手をポケットにつゝこんで、濡れ鼠になつて、カフェ・ド・パリの前に立つた。

四角な模様ガラスに、カフェ・ド・パリと佛字を浮べた、街燈に私は又屋守を見出した。

時々雨の雫が降りかゝつた。その度にこの不氣味な爬虫動物はよろめいた。

晝間はどこに居るか知らぬ。夜となるとこの動物は、都會の彷徨者の一人であるかのやうに不氣味に跳梁した。誰にも會はなかつたせいか、「やあ、屋守君！今晚は」と呼びかけて見たいやうな心安さを感じた。カフェ・ド・パリの中はひっそりとして居た。それが私に入ることを躊躇せしめた。次の瞬間、私は思ひ切つて、扉を押し開けた。

思つた通り、誰も居なかつた。いや！例の奥の卓子に一人坐つて居た。

たつた一人のお客が！而も葦田氏が！

私は無性に嬉しくなつた。私は兄弟のやうな親しみを感じた。とにかく、複雑な感情が、全く相互間の隔りをなくした。今や私は全く、彼からの威壓を感じなかつた。

「やあ！葦田さん！今晚は！」私はきさくに呼びかけた。葦田氏の青白い顔がこちらを向いた。「おゝ！！中川君か！」葦田氏は急に立ち上つた。

私は憂鬱な彼の顔に、ちらりと喜悅の浮んだのを見た。人間の感情つて、妙なものだ。仇敵のやうに相憎んでる人達でも、久振りに會つたとか、或ひは或る特殊の環境に於ては、親しみを感じるものだ。

私達は明らかに昂奮して居た。あたかも久し振りに會つた二人の戀人のやうに。

私達は女給達が側で不思議そうな顔をして見てゐることさへ氣付かなかつた。

「古い葡萄酒を持つて來て來れないか」

ミス・ソーニヤがカンナの花畑のやうな微笑を残して去つた。

「ね、君、中川君、今晩は二人で大いに飲まうではないか？、飲まう！今晩は二人だけの世界だからね」

古いボルドウ産の葡萄酒の芳醇な味は、熱した舌に心持良かった。葦田氏はろくろく味ふ暇もなくぐつとあふつた。

「もつときつい酒を一瓶持つて來て呉れ給へ！それからね、フロイライン・ソーニヤ、何かヴァリオンのレコードをかけてくれないか。」葦田氏は友達を呼ぶやうに、無造作にソーニヤの名を呼んだ。

外では未だ暴風雨は止んで居なかつた。

電信線の風にうなつて居るのが聞える。

良く注意すると、玻璃窓の外側に、大粒の雨滴の飛び散るのが見える。

カフェ・ド・パリには私達の外には誰も居なかつた、ミス・ソーニヤを残して彼女らは部屋の隅で靜かにトランプに耽つて居た。

フランスキツクはドードラの「スーベニール」のレコードを廻轉して居る。この素晴らしい蓄音器は、偉大なるヴァリオニストクラキスラーをそのまゝ再生する。

それにしてもかゝる暴風雨の晩は、そしてかゝる暖かく、靜けき部屋は、古い葡萄酒のなつかしい味は、どんなにか、遠い追想に耽るにふさはしいことか！

何の聯絡なしに、私は不氣味な屋守を思ひ浮べた。灰色のぶつぶつのある醜い背を餅のやうに吸ひつく吸盤を、赤い灯の周圍にぬらぬらと匍ふグロテスクな足取を――

どうして屋守を思ひ出したか知らぬ。又その屋守は今晩カフェ・ド・パリの入口で見たそれか、數日前街燈で見たそれか、或る

遙か昔、少年の頃無性に嫌忌を感じたそれか、それも全く知らぬ。

いや、今、私は半生を通じて、唯一匹の屋守を夫々異つた場所で見たかのやうな氣もする。

「君、馬鹿に沈んだではないか、しつかり飲み給へよ」私の奇怪な默想は葦田氏によつて破られた。

レコードは何度か變へられた。

ミス・ソーニャも、例の陰鬱な曲をピアノに向つて何度か叩き出した。

私は大分酔つて來たことを意識した。

葦田氏の青い顔は増々青ざめて來た。

「中川君！今晩是非私の家へ來て呉れないか？。君にだけに聞いて貰ひたい話がある。ほんとうに來て來れないか？」
十一時を過ぎての、この懇請を私は格別不思議にも感じなかつた。

5.

雨は小降りになつて居た。

葦田氏は案外確かな足取で先を行く。

大通りの店は全部戸を閉めて居た。

自分らと十間と離れぬところに、生きた人間が眠つて居るとは、到底信ぜられないほどの、物靜かな寂しい街を歩んだ。

少しアルコールが廻つて居た故か、道が非常に複雑であつた故か私にはその間のことが確と記憶に無い。或る時は、明るい街燈の下を辿つた。或る時は暗い小路を、而もその暗い小路は幾度か曲りくねつた。そして又明るい通りになる街になる。

直ぐ暗い小路、兩側から陋屋が迫つて居た。ブンと不潔な香が鼻をついて來た。

どこかの貧民窟らしかつた。薄暗のランプの灯つて居る家も數軒あつた様に記憶して居る。どこからか、火のついたやうに赤ん坊が泣いて居た。今度は靜かな屋敷町に入つた。どの家も廣い庭を持つて居て、庭樹がこんもり茂つて居た。犬の遠吠を聞いた。

た。一しきり犬達の合唱が続いた。

雨は全く止んだ。そして水底のやうに沈黙があつた。夜半に近い頃だ。

空氣は冷たかつた。私はぞくぞくとしみわたる顫へすら感じた。

遂に私達は洋風の門の扉を押して進んだ。

綠色に塗られた洋風の小建築の扉は、わけなく鍵で開かれた。

遂に私は、彼の書齋に導かれた。疊だつたら、十四枚も敷けるであらう。東北の二面が壁になつてゐた。東側の中央にストープ。西北の角にピアノ。それと並んでグラランドのピクトロラ。北側は大きな書棚があつてぎつしり書物がつまつて居た。赤い絹のリボンを巻いた黒猫が私の足にぢやれつて來た。首の金色の鈴がリン／＼と鳴つた。

「僕一人なんだから、全く遠慮はいらないよ。ほんとうにくつろいで呉れ給へ」

彼は馴れた手付きで、瓦斯コンロの火をつけ、茶瓶をのせた。

「今晚はこれから一つ手製のコーヒーを御馳走しようね。勿論ブラジルの香りきつての奴だよ！」

私は少し前から、彼の机の上の銀框の寫眞立てにじつと眼を注いで居た。それは若い美しい女の寫眞だつた。それはミス・ソーニヤの寫眞らしかつたが藝術寫眞のやうにぼんやりして、明確にはわかりかねた。いや確かにミス・ソーニヤだ。

私は心中でそう決めた。私は彼に捧げられた彼女の嬌笑を想起した。

「とう／＼あの寫眞に氣がついたんですね。ペティ・パウロと言ふ獨逸人だよ。尤も彼女のお母さんには日本人の血が混つて居たのだが僕がわざ／＼君に來て貰つたのは、ペティ・パウロとの關係に就いて聞いて貰ひたかつたんだよ。僕もペティ・パウロに關しては誰にも語るまいと思つて居た。ところが今晚カフェ・ド・パリで君に會ふと、是非君だけに聞いて貰ひたくなつたのだよ。どうしてだかしらない。とにかく是非聞いて貰ひたくなつたのだよ。ほんとうに今晚は不思議な晩だね。」

實際今晚は不思議な晩だつた。白晝の光りの下で見たら、全く馬鹿げた、乃至なんでもないこと、不合理なことすら、それで

全く調和して居るやうな氣がした。葦田氏がわざわざ私を拉して來て、物語ると云ふ氣持も、決して不可思議とは思はれなかつた。

私はぼんやりと、ミス・ソーニャーいやベティ・パウロと云ふ女を頭に描いた。葦田氏がすゝめたウエストミンスターをぶかぶかしながら。その美しい顔を、果ては丸く滑かく白い胸を、腕を、脚を。――

6.

葦田氏は煙草を一本取りあげて、ライターで火を點じた。鼻孔から紫色の煙りをゆるやかに吐き出した。熱いコーヒーも冷くなつた。

私は一息に飲み干した。私は未だ酒の味を欲した。葦田氏は二本目のウエストミンスターをふかしてしまつた。それでも依然として何も云はぬ。私も切つたやうな、それでゐて、夢見てるやうに、ぼんやりした頭をかゝえてぼんやりとベティ・パウロの寫真と葦田氏の吐き出す紫煙とを見つめて居る。

葦田氏はふと机の側に並んで居るボタンの一つを押した。パツと書齋の電燈が消えてしまつた。

その瞬間、私は天井の明り窓から、幽かな星影のしのび入るのを見た。庭の樹々の葉にたまつた、雨滴が時々地面に落ちる音より外には、全く音の絶えて居ることを知つた。

今度は部屋の中が軟い、眞晝の太陽に照らさせて居る南洋の海の底のやうな青色の光線によつて満たされた。間接照明がよほど巧妙に裝置されて居ると見えて、私はどこに光線があるのか全く見當がつかかなかつた。部屋中が同じ強さの光線で照らされて居た。何と言ふ奇妙な子供らしい道樂だらう。

私は其の光線の充滿の中に、青白い葦田氏の顔が、深海を泳ぐ魚の顔を聯想させるやうに浮んだ。

ゆらゆら立ち上る煙りは、細い海草が波に搖られて居るやうに見えた。

不思議、恐怖、――そんな感情は決して私を襲はなかつた。

凡べて當然のやうな氣がした。

葦田氏は確か四本目に火を點じた。

「君は潮丘銀子と云ふ詩人を知つてて居ますか？」突然葦田氏は唇を開いた。カフエ・ド・バリに於ける彼とは全く別人のやうな沈痛な調子だつた。私は相不變、濁つた頭の中で、何度も「潮丘銀子！」と呟いて居た。何の反應もなかつた。

私はぼんやりと、魚が呼吸するやうに、バリ・バク動く葦田氏の口もとを無意味に見つめた。

が次の瞬間、自分の顔を机の角へでも打ちつけて、やりたいやうな、憤怒を感じた。

何だ馬鹿らしい！ お前は潮丘銀子を知らないのか！ あつた花火のやうに現はれて、やがてバツと消えて行つた薄倖の詩人を知らないのか！ 馬鹿な！ 年中雪の降り積る北の國のやうに冷い詩境、時とすると火山のやうにあふれ出る情熱、野邊の桔梗のやうに清楚で、又そうかと思ふと南國のダリヤのやうに絢爛なタツチ！

深さの知れない教養の閃き！ 到底人間のそれとは思へぬデリケートな神経！

彼女は明らかに詩壇の慧星であつた。そして明星となつた。諸星はこの明星の前に光を失つた。あゝそしてこの明星は流れ星となつて消えて行つてしまつたのだ。

去年の冬の或る日だつた。新聞は一齊に女流詩人潮丘銀子の自殺を告げた。彼女は阿蘇の噴火口で投身したのだつた。

阿蘇の裕野は深い雲に蔽はれて居た。

而し夜となれば阿蘇の火煙は天に沖した。

そこは詩人潮丘銀子の死になんとふさわしい場所であつたことか！！ 勿論、彼女の骸——山の怒りが靜まつた時、彼女の死から十日ばかりの後だつた——はいくら捜しても遂に見あたらなかつた。それは寧ろ當然のことであつた。

葦田氏は、私の感情の雲なんかには全く知らないやうに、黙つて例の寫眞をじつと見つめて居た。

葦田氏の話——それは實に不思議だつた。いや私はどう形容して良いかわからぬ。
こんな話が果してあるのか知ら？、まるで一篇の詩のやうだ、いや悪く言へば痴人の夢のやうに思へるのだが——

x

冷い阿蘇の朝だつた!!、白い重い霧がじつとT温泉のある溪間に降つて居た。一間先きは、見えないやうな深い霧だつた。
部屋の窓を開いて見ると遠方の山が、深山杉の梢がぼんやり輪廓を示して居た。

霧の中から、私は毎日の小鳥の囀りと、溪流の潺々たる音を聞いた。

晩秋は割合に客人が少なかつた。私はいつものやうに、温泉の大きなプールへ下りて行つた。プールの中は、外の空氣が冷たい故か湯氣が濛々とたちこめて居た。私はプールの向ふ側の隅に白い人の肌を見た。珍らしいことではない!

私はずぶつと身を洗めた。

私は湯氣で逆上しそうになつたので玻璃窓を開けた。冷たい空氣が流れこんで來た。

湯氣は次第に水滴となつて落ちて來た。

君、私が何を其處に見出したと思ふ?

私は、私と一間と離れぬところに南海の人魚を見た。若い女の文字通り雪の肌を見たのだ。いや、その肌は新鮮なミルクのやうに滑らかで、そして、透き通つて居た。

次に私は絹糸のやうなブロンドの長い髪が湯に浮んで居るのを見た。

次に、幾分羞恥を含んだ碧い瞳を、眞紅の唇を、皓い齒を——

彼女こそ、ベティ・パテロだつたのだ。

そして同時に潮丘銀子だつたのだ。

葦田氏はこゝで寸時ボーズを置いて、小さな戸棚から、陶器の瓶と銀のコップとを出した。

そして、私のコップに緑色の液体をなみなみと満たして呉れた。彼は別の小瓶を取り出して二杯あふつた。思ひ出したやうにウエストミンスタをくはえた。

ベティ・パウロは神戸で生れた。彼の父は貿易商人だったが、彼女の幼い時に死んでしまつた。又彼女がミツシヨン・スクールの女學部の三年生の時、即ち彼女が十六の時母に先だたれたのだ、彼女には全く兄弟が無かつた、親切な人々は彼女に歸國をすゝめたが彼女は頑として聽き入れなかつた。

そして彼女は潮丘銀子となつたのだ。

私が阿蘇で彼女に會つたとき、彼女は廿一か廿三だつた。その時已に彼女は押しも押されぬ象徴派の詩人だつたのだ。

私達の間にブラットニツクな交際があつた。

或る夕、私達は二人で阿蘇へ上つたのだ。私は今でもあの晩のことを、はつきり記憶して居る。外輪山の彼方に沈みゆく落日の美觀を——金橙色に輝く雲を、黝い山の色を、はては淡く、儂い遠西を。芒の原を渡る風の音を。更に、月光に光り戦く芒の葉を、色を、光りを。私達は黙つて、暗い山路を夢中で上つて行つた。私達が漸く噴火口に近い廣漠たるS原へ行きついたのは十時前でした。満目芒の原のS原を山から吹き下す強い風が吹きまくつて居た。

恐しい風だつた。うつかり立つて居ると大人でも吹き飛ばされそうな風だつた。

利鎌のやうな新月が、風の芒原を銀色にうちぼかして居た。私は「山の寂しみが遠慮なく私の心の奥に浸み込むのをどうすることも出来なかつた。私はその時程強く人間に愛着を持つたことはない。私は心から人間を戀した。いや云ひかへれば其の時程烈しく彼女に愛を感じたことはない。

私は夢中で彼女を碎けるほど、強く抱擁した、

私は彼女に對して全く自身が持てなくなつた。彼女と従前の通り交際することは全く不可能なやうな氣がして來た。

彼女の豐醇な肉体の香りは幻想となつて私を苦しめる。私は烈しい屈辱を感じた。

と言ふと、妙に聞えるかも知れぬが、實は私は極端な獨身主義者だつたのだ。あらゆる女性を輕蔑するが故に、私は一生獨身を通すつもりだつた。私の女性に對する輕蔑への第一歩は少年の時、いや——こんなことを語る必要はない。

私の話は冗漫に流れて來た、私は早く結末をつけねばならぬ。

要するに私は私自身に全く自信を失つたのだ。私の長い間に培はれた理性と努力を以つてしても、私は夏の雲のやうに湧き起る人間の本能に打ち勝つことは出来なかつた。私は結局弱い人間に立ち返つたのだ。私は猜疑した！私は煩悶した！そして私は輕蔑した！弱い敗北者を。私は最後の努力を以つて、彼女の許を颯然と去つた。

數日の後、彼女の死を私は、新聞紙上で知つた。彼女は死んだ！！生前彼女はよく訊ねた。

——ね、あの噴火口に飛び込んだらどんな心持がするでせう？

——さあ、やつて見ないとわかりませんね。

そんな馬鹿げた會話の後、いつも彼女は淋しそうに笑つたものだ。

結局彼女は噴火口に飛び込む氣持を體驗したのだ。少なくとも、地上から、潮丘銀子は消へて行つたのだ。

私は段々に意識が朦朧として來た。私は殆んど無意識に、洋酒の瓶を殆ど空にして居た。酔ひしれてしまつたか、氣を失つてしまつたのか、それから後のことは全く知らない。

翌日正午に近い頃私は不完全な眠りから醒めた。私は葦田氏のベットに寢て居たのであつた。自宅へ歸る自動車の中でも私は催眠劑を飲まされたやうに眠りこけて居た。

其の後、私はカフェ・ド・パリへ通ひつめた。然し、葦田氏には會はなかつた。葦田氏に就いても杳として不明である。葦田氏の家を訪ねやうと思つても、私は全く憶えて居ぬのである。雜誌社へ問ひ合しても、舊住所のみで、最近移轉したことになるのである。

あの晩から一週間位の後、葦田氏から阿蘇へ旅行すると言ふ簡単な便りを受け取つた。

私は不吉な豫感を感じた。

私の危惧は不幸にも的中した。數日後全國の新聞は大々的に若き小説家葦田青丘氏の自殺を報告した。

私は迂闊にも新聞を見る迄彼の死を知らなかつた。私は不思議なほどショックを受けなかつた。葦田氏の死は必然のやうな氣がした。東京の自宅——私の訪ねた例の家ではない——に、彼の遺書が発見された。結局彼は死を求めて阿蘇に赴いたのである。

遺書は簡單だつた。而し自殺の動機については何ら確立的の事實はあげてなかつた。

自殺の結果については色々臆測された。

行きづまり。失戀。強度の神經衰弱——何れも、おきまりのものだつた。

遺言書の結果、意外にも彼の著作權並に未發表の作品の發表權が私に譲渡されたことだつた。彼には遺族と稱すべきものは一人もなかつたし、交友と稱すべき者も殆んど無かつたが、私にとつて、否世人に對しても、餘りに意外なことであつた。

9.

私は、もう良い加減なところで、この話の結末をつけねばいけぬ。眞のことを言へば、この事件は全く不可解の連續だつた。考へれば考へるほど、夢を見つづけたやうな氣がする。而し、私はどうしても葦田氏の死が信ぜられぬのである。少なくとも、葦田青丘氏は地上から消え去るとも、彼の肉体はそのまま残つて、自己の超人的仕業を手を叩いて笑つて居るやうな氣がする。こんなことを言ふと、きつと世人は私が氣が狂つたと一笑に附すかも知れない。而し依然として、自分一人でそう信じて居る。勿論私がこのやうな無鐵砲な論を立てるに、相當の根據があるのである。私は、彼の作品を整理して居る中に、彼の筐中に未發

表の短篇を發見した。

「奇妙な自殺」と言ふのがその短篇の題である。

「或る社會的名聲を持つた男が色んな事情から、極度の神經衰弱となり烈しい厭世觀、厭人觀に陥る。遂には自己にも嫌惡を感じ出す。で自殺を決行せんとする。而しその男は素晴らしい惡戯を思ひ付く。何人も考へつかなかつた奇妙な惡戯を！」

彼は死体の絶對に見つからぬ自殺を色々考へる。ダイナマイト自殺。染料工場の苛性曹達槽。噴火口の投身自殺。それとも、日本アルプスあたりの地隙や斷崖に落ちること、等々——彼は最良の方法として、噴火口を選ぶ。不可能なことではない。盛に噴火して居る噴火口の中へ跳び込めば全く死体の探索は斷念せられる。よし死体の在所がわからぬからと言つて誰一人怪しむ者はない。彼は遂に周到な準備の下に決行する。彼の遺書や遺留品は夫々然るべき場所に發見せられる。

新聞は確定的な事實のやうに、彼の死を告げる。全く死んだ彼がどうして旅券を手に入れたのか、變裝して浦鹽行き汽船に乗つて居る。そして自分の死を報ずる新聞を見てニヤリと笑ふ。」以上が「奇妙な自殺」の荒筋なのである。この信することの出来ないやうな奇異なストーリーが彼獨特のねち／＼した惡魔的描寫によつて何らの疑惑も挾まれないやうに巧みに綴り合はされて居た。

こんな短篇を後に残してをいたのは故意か偶然か？ 偶然にしてもあまりに手ぬかりだ。故意にしては惡戯が過ぎる。

又彼の死体が決して發見されなかつたことも、も一つの理由である。

人はどう思つても良い。假令狂人視されても良い。私は私の考へを信ずる。

而しどうかすると、私は全く自信を失ふ。

彼は矢張死んだのかも知れぬ！私の擧げた反證の理由だつて極めて薄弱なものである。

結局私の頭は混亂しきつて居る。全然正確な判斷力を失つて居る。私は唯事實を記して世の識者に示さう。彼が死んでから、二月を経た今日この一篇を發表しても、誰も迷惑は感じないであらう。

現在私は不明瞭ながら、一つの假設を組み立てゝ居る。勿論私自身すら私の荒唐無稽な想像を信じては居ぬ。又信じたくもない然し、私の心の隅の隅に、彼の死を信ぜぬものが残渣となつて残つて居るのは事實である。

いや、その心は潮丘銀子の死すら信じないのである。潮丘銀子と云へば、世人も新聞も、全く葦田氏の死と無關係ときめこんで居る。

それだけは確かに謬想だ。二人の死には確かに有機的な關係がある！

最後に私はミス・ソーニヤの失蹤を告げねばならぬ。嚴重な探索の結果を以つてしても遂に行方不明だつた。次のやうなことは信ぜられないだらうか。

ベティ・パウロとミス・ソーニヤは結果同一人ではなかつたか！ベティ・パウロとミス・ソーニヤは確かに瓜二つだ、ミス・ソーニヤはボヘミアで育つたと言つて居る、彼女は全くロシア語は語らない。ミス・ソーニヤはベティ・パウロの偽の名ではなかつたか！

それにしても、人間はそんなに、性格なり、表面なりを全然變へることが出来るだらうか！

ベティ・パウロ、ミス・ソーニヤが同一人と云ふものは全く信ずるに足らないかも知れぬ！。これは私が、そうしたら、斷然葦田氏の傑作に優るとも劣らない素晴らしい結末だと思ふだけだ！

白狀する！結局葦田氏の謎の死に就いて、私は全く五里霧中である。

而し、而し、恥かしいことではあるが、混亂しきつた頭の中で、かの頑固なる分子はまだ死にきらないで、何處か遠い世の果てに、死んだ葦田氏とミス・ソーニヤであり、潮丘銀子であるベティ・パウロが、原始そのまゝな愛の生活を營んで居る光景を夢見て居る。

そして、虫の良い話だが、彼らがこつそり私だけに幸福の便りを呉れはしないかと期待して居るのである。